



かしま
ロボット「便」

子宮がんの一部で4月から、ロボット手術が保険適用となりました。患者の医療費負担が軽くなります。ロボット手術というと、ロボットが自分で病巣を切り取る「医者いらず」の手術と思われるかもしれませんが、あくまでも執刀するのは人間です。

コンピューター制御された鉗子(先端にハサミやピンセットのついた器具)が、医師の手の動きを忠実に再現するため、従来の腹腔鏡では難しかった手術が可能になりました。これまで、がん手術ではおなかを大きく切っていました。ロボット手術は鉗子を通す小さな穴でできるので、患者の体の負担は非常に軽く、入院期間も開腹術の3分の1〜4分の1ほどです。

これまで当科では、私費の臨床試験として子宮がんのロボット手術を提供してきましたが、高額な機械と専用の鉗子が必要で入院費は高額でした。今後、低リスク体がんには高額療養費制度が適用され

子宮がんのロボット手術

一部で保険適用始まる

るので、爆発的に件数が増えていくでしょう。実際、米国の子宮がん手術の8〜9割はロボットで行われています。

ロボット手術は新しい高度医療技術なので、保険診療できるのは、トレーニングと症例を重ねて厚生労働省の認定を受けた施設だけです。婦人科の提供施設は次第に増えてくると思われますが、現在九州では当科のみです。

まだ保険適用のない頸がんに関しては、当科でロボット広汎子宮全摘出術を先進医療(手術代だけ私費、それ以外は保険適用)として行っています。生命保険に先進医療特約を付けている方は保険診療より安価で受けられます。

頸がんの妊娠性温存手術(術後の妊娠を可能にする縮小手術)と、高リスク体がんのロボット手術は、従来通り私費臨床試験として行っています。この2種を提供できるのは現時点で国内3施設ですが、将来的に保険適用されることを期待しています。

(鹿児島大学病院産科婦人科教授・小林裕明)

◆第1・3水曜掲載。